
死んだ荒野と彼岸の歌

返歌分式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んだ荒野と彼岸の歌

【Nコード】

N5750P

【作者名】

返歌分式

【あらすじ】

死んだ荒野。私はそこに立っていた。そこに立つ経緯の前後が、私の記憶に無い。首を傾げ、辺りを見回す。私はその場所がどこなのかを理解し、胸を押さえた。嫌な場所だ。できれば一生来たくなかった場所だ。じくじくと身体の中から末端を目指して傷みが広がっていく。傷みを逃すための涙は、とうの昔に枯れ果てていた。足元の地面をぼんやりと眺めながら私は小さく息を吐く。死を刻み付けた廃れる荒野に、物悲しい乾いた風が吹き抜ける。

死んだ荒野。

私はそこに立っていた。

そこに立つ経緯の前後が、私の記憶に無い。

首を傾げ、辺りを見回す。私はその場所がどこなのかを理解し、胸を押さえた。

嫌な場所だ。できれば一生来たくなかった場所だ。

じくじくと身体の中から末端を目指して傷みが広がっていく。傷みを逃すための涙は、とうの昔に枯れ果てていた。足元の地面をぼんやりと眺めながら私は小さく息を吐く。

死を刻み付けた廃れる荒野に、物悲しい乾いた風が吹き抜ける。その風に押されるように私は歩きだした。

歩いて歩いて、足が重くなり引きずる形になりながらも私は歩き続ける。

周りの風景は変わらない。私の記憶のままに再現されている。ただ、違うところと言えば、死体が無いことか。

足場が悪い。元々の地形の関係もあるが、戦いのために踏み荒らされたせいもあるだろう。

歩き続けて、私は気付く。

私はいつの間にか坂を登っていた。

草木が生えない、地面の色をむき出しにした山を。

苦笑する。なぜ気付かなかったのか。

もしかしたらこれは夢なのかもしれない。私はそう思った。

そして私は頂上に辿り着く。
そこには友人がいた。

私はとても驚いた。

友人は全身を血に染め、黒い物体に腰かけ歌を歌っていたからだ。
山を登った疲れなど一気に吹っ飛んだ。私は友人の傍に駆け寄る。
大急ぎで駆け寄る私に気付いた友人は歌を止め、陽気に

「やあ」

と私に片手を上げた。

私は友人の安否を確認するため、彼の身体に触れた。
そして私は愕然とする。

友人の片腕が、何かに噛み千切られたかのような傷跡となっていた。
た。

狼狽し、私は友人に問う。「痛くはないか」と。

「痛くは無いよ。さっきまでは痛かったんだけどね」

友人は屈託無く笑った。

私は即座に、それを嘘だと思った。

傷からはなおも血が滴っている。顔色も悪く、血の気が無い。
だが彼は本当に何事もなく、まるで傷なんてものは無いといった
ように綺麗に笑うものだから、私は黙って苦い顔をするしかなかった。
た。

「それよりも見てくれ。俺はやつと悲願を果たすことができたんだ」

親密な笑みが、無邪気な笑みに変わる。

友人の指が指し示すのは、友人が今腰かけている黒い物体だ。

私はそれに視線を移し、言葉を失う。

それは、『死』そのものだったからだ。

私の親しい友人達を奪った、私の愛した人を食らった『死』。

この場所を死の荒野にした元凶。

友人はそれに腰かけ、血に塗れ、腕を失い、それでもなお笑いなから私に「どうだ？」と言う。

「さつき君に会ったんだ。君と、君の恋人に、だ。君と彼女は昔のままだったよ。そう、あの時のままだった。君と彼女は、最後だったんだな。生きている人間の中で、最後だったんだな。こいつが君と彼女に襲い掛かっているのを見て、俺はいてもたってもいられなくてね。俺はどうせ死んでしまっていたし、そのくらいはいいだろうと思ってこいつに戦いを挑んだんだ。腕を食われて、他も痛みに襲われた。だけどね、俺は勝ったよ。あの時に勝てなかったこいつに、俺は勝てたんだ」

『死』は、確かに息をしていなかった。

ドロリと濁った目。大きく開かれた獣の口からは赤い舌がはみ出ている。

よく見てみれば、周囲の地面は血を吸い黒く染まっていた。

動かない『死』は、憎いほどに青く晴れた空を睨んでいる。

その頭をゆるりと友人が撫でる。

「本当は君と彼女を捜しに行きたかったんだけどね。君と彼女はとうなっただろうか。君は彼女がいなくなってから、絶望を目に映すようになっただけだね。少なくとも、今回は彼女は生きている。彼女が生きているのなら、君はどうなるんだろうね。絶望を映さないようになるんだろうか。ちゃんと前を見るようになるんだろうか。俺はそれがとても気になるんだよ。でも、追えなくてね」

苦笑する友人は、私に目を向けていない。どこか遠くを見ていた。私は彼の話を聞きながら、色々なことを思い出していた。その昔、私に恋人がいたこと。

多くの友人がいたこと。

楽しい日々があったこと。

それの全てが『死』によって食い尽くされたこと。

死を刻んだ荒野の中、私と友人だけが生き残ったこと。

その友人も、近い過去で私のために死んだこと。

私は色々なことを思い出し、泣きたくなった。

だが私の涙は枯れ果てているもの。泣きたくともこの目から流れるものはなかった。

「よく晴れている。とても気分が良いな」

友人はそう言って歌を歌いだす。

私はその歌を知らなかった。異国の歌が。

私には分からない言語で歌われるそれを、私は聴いていた。

そして私はいつの間にか聞いていた。「私はどうしたらいいのか」と。

「それは俺が決めることじゃない。君が決めるといい。選択肢は無いよ。君が何をしたいのか、したくないのか。どうしてもなるし、どうしてもすればいい」

友人の言葉は柔らかかった。

柔らかく私を傷つける。

私は友人の言葉に、「そうか」と頷き、彼の残った腕を掴んだ。

私は語る。「ここから出よう」と。

どうしてもすればいい。その言葉通りに私は行動する。

友人はそんな私の行いに、困ったように笑った。

「ああすまないね。俺を立ち上がらせても無駄だよ。足が折れているからね」

ならば、と私は彼を背負った。

友人の困った声が背中から聞こえる。

「ああ困ったな。俺は死んでるよ」

そんなことは無かった。

友人は生きていた。

私と会話している。

背中から伝わる熱は、彼の命の証明だった。

だから私は彼の言葉を無視し、丘を降りていく。

足場の悪い地面を踏みしめ、私は降りていく。

私は友人を助けたかった。

私にはそれしかなかった。

どうしたらいいのだろう。分からなかった。

どんどんと、私が最初に立っていた場所に近づくにつれ、私は泣きたくなっていった。

おかしかった。私に感情というものがあるのがとてもおかしかった。

感情なぞ、彼女を失ったその時に置き忘れたものだと思っていた。私をかばって死んでいった彼女と共に、昇華したものだと思っていた。

私は辿り着く。

私が最初に立っていた場所に。

私は友人に声をかける。

これで友人は助かるのだ。

根拠も何も無い考えがあった。
私の言葉を聞いた友人は言った。

「ああ困った。すまない我が友人。俺はここから出られないんだ」

背から聞こえた声と、血の臭い。

私の服は血に汚れ、背の重みが増した。

地面と友人の身体に押し潰された私は混乱した。

何が起こったのか分からなかったからだ。

友人の身体を押し退け、その顔を見る。

友人は安らかな顔を私に晒し、息を、鼓動を、命を、止めていた。

私は嘆き悲しんだ。

涙はこぼれない。ただ叫ぶ。

叫び、叫んで、それでも夢は覚めない。

だから私はこれは夢じゃないと思った。

激しく痛みを主張する胸を掻き抱きながら、私は嘆く。

どれほど嘆いたか、私の耳に歌が届いた。

それは友人の声が奏でる旋律だった。

私は驚愕し、友人が横たわる地面を見る。

そこに友人はいなかった。

私は走り出す。

丘に向かって走り出し、空回る足を漕ぎ、岩肌にぶつける身体を
いとわずに、私は期待した。

私は頂上に辿り着き、そこに友人がいることに歓喜した。

血に塗れた友人の傍に駆け寄る。

大急ぎで駆け寄る私に気付いた友人は歌を止め、陽気に

「やあ」

と私に片手を上げた。

私はそのことに軽い怒りを感じた。

その怒りを言葉に乗せる。「なぜ私から離れた」と。

友人は不思議そうに首を傾げた後、言った。

「ああ。君を残して死んでしまったことは謝るよ。だけどね、俺は君に生きていて欲しかったんだ。俺は、十分すぎるほどに人生を楽しんだからね。君はまだだろう？ 君は絶望していた。絶望している。けど、これから先生きていれば、いつかその目に光が灯るだろうからね。俺は君に生きて欲しかったんだ」

自分勝手なことを、と叫んだ。

私は友人の残った腕を掴んで、背負う。

今度こそ友人を。今度こそ。

友人の困った声が背中から聞こえる。

「ああ困ったな。俺は死んでるよ」

そんなことはなかった。

そんなことはなかった。

否定し、私はまた歩き出す。

そしてまた友人は死んで、私はまた丘を目指して走り出す。

どうしたらいいのか分からなかった。

私は一人だった。

私はこうするしかなかった。

何回も何回も同じことを繰り返して、何回も何回も同じ結末を見て、私の嘆きは巡る。

どうしたらいいのか分からなかった。

何回目かも分からない行為に、私が心身共に疲れてきた頃、それは私の目の前に現れた。

人だった。

それは、私が一番会いたかった人と同じ姿をしていた。

「困っているようね。私なら力を貸せるかもしれない。あなたの困り事を私に話して」

微笑むのは、彼女だった。

『死』に食い尽くされた彼女。

私は彼女に再び出会えた喜びにその手を取る。

会えたことを喜ぶ言葉を前置きに、友人のことを話し終わると、彼女は頷く。

「そう。だけど私はあなたの言う彼女ではないの。ごめんね。それとそのご友人のところに、私を連れて行って。彼を外に出してあげたいのでしょうか？ 私ならできるから」

私は落胆し、だがすぐに喜の色を取り戻す。

今までの行為が、同じ結末を迎えていたそれが覆るかもしれない。

私は丘へと彼女を案内した。

途中、彼女に何度も私が知っている彼女ではないのかと問いかけながら。

友人の歌声を終着点に、私は彼に駆け寄った。

大急ぎで駆け寄る私に気付いた友人は歌を止め、陽気に

「やあ」

と私と彼女に片手を上げた。

そして友人は満面の笑みで、本当に嬉しそうに言った。

「ああ良かった。君と彼女は生きていたんだな。良かった。俺は嬉しいよ。君と彼女は、ちゃんと逃げれたんだな。ああ良かった。良かったよ」

血に塗れた友人は手放しに喜びを表現し、私を困らせる。

どう言葉を積もらせればいいのか思索している私を置き、彼女は友人に語りかける。

声は、音は優しくかった。彼女は彼女の声色で、歌を歌うように言葉を歌う。

「あなたはここから出たくないのね」

私と友人は驚きに身を固くする。

彼女は優しく微笑んで、友人の頬を柔らかい手の平で包み込んだ。

「私はこの場所の管理人。だから私は知っている。あなたはここから出たくないのね。あなたは知ってしまったから。可哀想にね。今までなんの疑問も持たずに生きていたあなたが、今知ってしまったから。可哀想にね。あなたは友人に知られなくなかったのね。だから死に続けた。一度目の、死を知る前までのあなたに戻れないことを知っていたから、あなたは死に続けた」

友人は痛みに顔をしかめた。

悲鳴をあげようとする喉を自分で絞めながら、友人は痛みに悶えた。

彼女の手から逃れようとする友人は、私を見て呟く。

「すまない」

友人の目から涙がこぼれ、私は動けずにいた。
彼女は言葉を歌う。

「もう繰り返さなくていいから。大丈夫。眠りなさい。悪夢なんて見ないから。私が管理するこの場所では、絶対に」

彼女が言い終えると、友人は目をゆっくりと閉じた。

私はそれを、懺悔のように思えた。

友人が目を閉じ、消えていく。

今まで友人がいた場所には何も無くなった。

友人も、『死』も。

私は呆然と彼女を見る。

彼女は、優しい、残酷なまでに優しい微笑みを持って私に手を差し出す。

彼女の手の平の中には、青く抜ける空色の玉があった。

「あなたの望んだもの。あなたが欲しかったもの。私に望んだもの。さあ、あなたの友人を外に出してあげて」

私は青の玉を受け取る。

そして私は真に理解する。

友人は死んでしまっていることを。

「ここから出たら、あなたは一人で歩いていくの」

彼女は、彼女の形をしたなにかは、悲しく笑う。

私はこんなことを望んではいなかったのに。

生きている友人と、ここから出たかったただけなのに。

「絶望して、絶望し続けて、周りを見なかったあなたは全てを失った。あなたの友人はあなたの助けが必要だったのに、あなたは絶望に身を浸した。あなたのことを支え続けた彼に、最期まで目を向けなかった。それなのにあなたは自分勝手に嘆くのね。自分は不幸だと、何故自分ばかりが、と」

彼女の形をしたなにかは、悲しく笑う。

その微笑が、友人の笑みと重なる。

私は助けが欲しかった。

彼女を奪った『死』が憎かった。

私にとって、彼女が全てだったのだろう。

だから私は、だから、それはとても、私は、友人は、友人を殺したのは、友人の気遣いすらも、唯一の助けも、私はころした、友人が私をかばったのは、私のために死んだ友人は、友人の意思といった形で私は友人を殺した。

私は叫ぶ。

叫びの歌と共に、私は泣いた。

（後書き）

絶望のまま生きた男と、彼を助けたかった友人の話。
彼女はその代弁者。

そんな感じ。

ちなみに友人が知ってしまったことは、彼への憎しみです。
人間、死の瞬間まで聖人君子にはなれないと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5750p/>

死んだ荒野と彼岸の歌

2010年12月19日01時01分発行